

建築ガイド

見逃したらもったいない！建築も作品の一つです

横須賀美術館の建物は、ちょっと変わった風貌をしています。

ガラスの箱の中にまた白い箱が入っている“入れ子”のような構造、白い箱の方には何やら丸い穴がポコポコと開いている…。普段は展覧会を見るだけで、建物には目がいかない方にも是非知っていただきたい10のポイントをご紹介します。



設計のプロセス

横須賀美術館の設計者選定は、建築案ではなく実績や面接で選ぶQBS（資質評価）方式によって行いました。結果、山本理顕設計工場が選ばれ、月2回程度「プロジェクト会議」と名付けた打ち合わせを行い設計をすすめていきました。この会議には、設計事務所、横須賀市の美術館開設準備室、建築課・設備課の担当者、時によりさまざまな分野の専門家がゲストとして参加しました。本当に何もなところから使う者とつくる者が一緒になって考え、市内施設での収蔵品展や建設予定地でのワークショップなどイベントの開催と平行して、プランを練っていきました。途中、使い勝手とデザイン性とのせめぎ合いも多々ありましたが、なんとか一つの案にまとまりました。現在開館3年が経ち、時に個性的な空間と格闘しつつも、日々工夫して使っているような状況です。

【設計者略歴】

山本理顕（やまもと りけん）

1971年東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了。1973年山本理顕設計工場設立。横浜国立大学大学院教授。代表作は、岩出山町立岩出山中学校（毎日芸術賞）、埼玉県立大学（日本芸術院賞）、公立はこだて未来大学（日本建築学会賞作品賞）、東雲キャナルコートCODAN（グッドデザイン賞金賞、BCS賞特別賞）、福生市庁舎など。北京、ソウル、アムステルダムなどでも公共建築や集合住宅を手掛ける。



工事現場で。右から2人目が山本氏。

【施設概要】

開館／2007年4月28日
竣工／2006年7月
設計／山本理顕設計工場
構造／鉄筋コンクリート造
一部鉄骨造
階数／地下2階地上2階
敷地面積／約22,000㎡
建築面積／4,234.42㎡
延床面積／12,095.15㎡

小さな丸穴からは
森の深い緑が見えます。

晴れた日の夕方、

丸穴から見る空の色は
驚くほど濃い青色です。

大きな丸穴の海を大きな貨物船が
通過して行きます。

雨の日、寒い日、暑い日、

長い時間、短い時間、

時の変化を楽しむことができる

美術館です。

—— 山本理顕

ロゴマークとサイン計画

海の写真を使った「横須賀美術館」のロゴマークとヒト型ピクトグラム（単純化した図による表示）



によるサイン計画、どちらもバツと人目をひくものとなっています。デザインしたのは、廣村正彰氏。岩出山小学校など設計者の他の建物でもサイン計画を担当しています。

ロゴマークの海は、美術館の前に広がる東京湾の写真。海の近くの美術館であることが一目見てわかるようなVI（ビジュアルアイデンティティ）を、ということで採用しました。このVIは、美術館の表札とも言えるアプローチ脇の大きな館名看板にも使われています。

館内のサインは、特徴あるヒト型ピクトグラムが各場所への案内を担っています。「階段」「図書室」といった場所を示すだけではなく、階段を昇る人や本を読む人をかたどるなどそこでの行動も表している、少しだけ人格があるようなあたたかみのあるものとなっています。美術館という一軒敷居の高そうな場所と訪れる人々をつなぐ大事な存在です。



館内のピクトグラム。左：図書室 上：階段・エレベーター



メインアプローチにある館名看板（*）



上：海側から見た美術館外観（*）
右：山側から見た美術館外観

1 景観と一体化した外観

美術館の敷地は、後ろ三方を森に囲まれ、北東が海に面しています。美術館が建つ前は芝生の公園と駐車場がありましたが、必ずしも眺望が海に開けていたわけではありません。しかし、東京湾の眺望がすばらしく、「地形を利用して景観と建物とを一体化させたい」というのが、当初からの設計者のイメージであり、我々の希望でした。海側から見た時に背後の森への視線が抜けるよう、また、塩害対策からも建物はできるだけ地中に埋め、地上に出ている部分は森に隠れるようにし、敷地の海側は、なだらかな斜面でそのまま海につながるようなイメージの配置が、設計者から提案されました。こうして、ボリュームの半分を地下に埋めた低層の建物ができあがったのです。山側から下りてきた散策者は、地続きで屋上広場へと誘われます。そこからの眺めは、この場所に美術館という、日常を離れて一時心を開放するための建物が存在する意味の一つと言えるかもしれません。



上：メインアプローチ
下：観音崎公園からのアプローチ（*）

2 通り抜けできるアプローチ

美術館の建物のうち、本館は、展示棟・レストラン棟・管理棟からなります。本館へのアプローチは、海側からと山側からの二つで、海側からのメインアプローチは、前面道路から建物正面を臨み、海の広場脇のスロープを上がっていきます。そして、レストランの前を通り、正面玄関からエントランスホールへ。一方、山側からのアプローチは、県立観音崎公園を散歩して来た方などの利用を念頭に、山の広場・屋上広場を経由してペントハウスから館内に入ることができるようになっています。二方向から出入りでき、通り抜けできるようにすることで、郊外型の美術館として単に展覧会を見に来るだけでは終わらないアクティビティを目指しました。観覧券を持っていない方でも気軽に入館し、休憩したり、美術図書室で本を読んだり…。また、観覧券を持っている方も、当日なら何回でも展示室へ再入場できるので、観覧中でも周辺散策で息抜きをし、また戻ることができるようにしています。



ダブルスキンの外観（*）

ダブルスキンの内観（*）

3 ガラスと鉄板のダブルスキン

本館展示棟は、ガラスと鉄板によるダブルスキン（二重皮膜）で覆われています。立地をいかして館内にふんだんに自然光を取り入れることと、展示室における光のコントロールは、この建物を設計する上で重要な要素の一つでした。そこで設計者は、一枚の殻で全体を包み、そこに開けられた穴の大きさや数で光を制御したらどうかというアイデアを思いつきます。そして、穴を開ける自由度と塩害対策を考えると、外側にもう一枚、透明なスキンが必要だということになりました。こうして、外皮には錆や経年劣化が少ないガラスを、内皮には溶接した鉄板を用いることによって目地がない平滑な面が続き、独特の雰囲気を持つ内部空間ができあがりました。展示用には閉じた空間を用意しつつも、エントランスホールや吹抜のギャラリーでは自然光を自由に取り込み、開放感のある空間を実現させ、美術館が必要とする様々な光の状態を制御しているのがダブルスキン構造なのです。

ダブルスキンの中は、エントランスホールなどの無料スペースと地階展示ギャラリーとの吹抜空間です。美術館に入るといきなり地下をまたぐブリッジを渡り、眼下に展示された作品を見ながら島状の部分に至るアプローチは、空間体験としても楽しいものとなっています。内皮の内側は、壁と天井が連続して吹抜空間を覆う、鉄板という素材ならではの入り隅のない天蓋のような仕上げです。この天蓋空間の中は、さらに入れ子状の構成になっており、中央に展示室・収蔵庫などが島状に配置されています。また、この島状のボリュームと内皮との間の空隙が、吹抜の回廊として地階所蔵品展示ギャラリーを構成しています。ここは、天井高さが約12m、幅が南・西・東側で約4m、北側で7.5mの大空間であり、横須賀美術館で最も特徴的な空間であると言っても過言ではありません。回廊状のギャラリーと、それに鈴なりに付属する小さな展示室を巡りながら、所蔵品が展示されています。

4 吹抜の回廊

北側所蔵品展示ギャラリーからブリッジを見る



南側所蔵品展示ギャラリー（*）



横須賀美術館 ここがみどころ —10のポイント

Point 10



エントランスホール（*）

上：北側所蔵品展示ギャラリーの丸穴
下：水平線の見える丸穴



5 丸穴の役割

エントランスホールや吹抜の地階所蔵品展示ギャラリーでは、ダブルスキンの内皮である鉄板の天井や壁に丸穴を開けることで、自然光の分量や熱、視線をコントロールしています。外皮である屋根ガラスは、結露防止と自然光の拡散を目的とし、乳白の樹脂フィルムを挟み込んだペアガラスを使用。直射光が入らない北側は、穴を大きく数も多く配置、一方、南側は穴が小さく数も少なくなっています。南側ではさらに、展示作品に応じて丸穴を塞いだり開けたりして使っています。これにより空間に明暗が生まれ、北側に行くにつれ、より明るい空間となっています。また、1階企画展示室を移動していくと、展示室と展示室の間の「ギャラリー」と呼んでいるスペースから丸穴越しに海の景色を見ることができ、展示室間のちょっとした緩衝空間となっています。他の丸穴からも周囲の緑や空の色などが見え、館内にいながら外の天気や自然を感じることができます。

ミュージアムショップから
レストランをみる（*）



6 開放的な レストラン棟

本館展示棟の手前には、全面ガラス張りのレストラン棟が配置されています。展示室・収蔵庫などは、作品保護の観点からなるべく温湿度変化が少なく直射光が入らない奥まった位置に置きたいので、奥まったところへ、地中へと埋め込んでいます。その代わりに、レストラン・ミュージアムショップ・ワークショップ室といった、むしろショーケース的に明るく演出したい部屋を前面にもってこくことで、この立地ならではの、広場と建物との一体感を味わえる空間をつくり出しています。特に、ワークショップ室を最前面に持ってきたのは、開館前に建設予定地で実際に屋外ワークショップを行い、参加者の動きなどを検証した結果です。広場に面した開放的な空間を使うことにより、場所性を目いっぱい感じながら、アクティブなワークショップを展開できるこの部屋は、人々に横須賀美術館を印象づけ、展覧会観覧以外の利用価値もあることを伝える役割を果たしています。

7 小屋裏を 見せる

横須賀美術館の建築的特徴のうち、他の建物にあまりないものの一つが、海を臨むことのできる小屋裏（屋根と天井の間）の眺めです。本来、小屋裏（屋根と天井の間）は、お客様に見せる必要のない空間ですが、ペントハウスへ上がるための螺旋階段とシースルーエレベーターの途中から覗くことができます。小屋裏には、大人がかがんで入れる高さがあり、照明・消火設備・感知器・換気用ファンなど設備機器が設置され、それらのメンテナンスをここで行うことができます。また、展示ギャラリーへスポットライトを照射したり、時には作品の吊り下げや設置などを行うこともあります。屋根の上下弦材をつなぐ束材やプレースの納まりに関しても、見えがかりにボルト、ナットなどを極力使用せず、すっきりとした見え方となるようにデザインされています。美しく繊細な納まりの向こうには、東京湾のブルーがこれまで美しく見える、隠れたおすすめ景観の場所です。



小屋裏からの眺め（*）



若林奮展風景
(2008年)

8 展示室の開口部

開放的なイメージのある横須賀美術館の建物ですが、展示室については、作品保護の観点からやはり一定の暗さを保っています。

ただし、地階北側の所蔵品展示ギャラリーと1階展示室1については、直射光は入りませんが、丸穴やガラス張りの壁によって自然光や外の気配を感じられる空間となっています。特に、展示室1については、用途に応じて仮設壁を引き出してくることで、明るくも暗くもできるようになっています。現代美術のインスタレーションやブロンズの彫刻作品など、ある程度明るい部屋に置いた方が効果的な作品の場合は、四角い部屋の一面分の壁を取り払い、ワークショップ室越しに外の景観が見える形で展示をすることもあります。2008年に開催した若林奮展では、海の広場に設置された若林の巨大な作品《VALLEYS》を展示室の向こうに眺められるように設え、横須賀美術館でしか実現し得ない展示空間をつくり出しました。

9 ルーバー型照明

展示室内は、さまざまな展示作品に対応するため人工照明となっており、蛍光灯による間接照明+スポットライトというシステムを採用しています。中でも特にご紹介したいのは、1階企画展示室の照明器具です。アルミの特注型材によるルーバーを天井面から45cm間隔で吊り下げ、ルーバー上部に一本おきに蛍光灯を上向きに設置しています。天井を照らすことで、光源が見えないやわらかな地明かりを得ることができます。また、ルーバーの下端には、やはり一本おきにライティングダクトを設置しており、スポットライトが自由に設置できるようになっています。なお、蛍光灯はブロックごとに、スポットは一灯ごとに調光しています。照明器具としての機能を持つものとダミーのものを一本おきに吊り下げ、ルーバーの本数を増やしているのは、照明器具が下がっているにも関わらず、天井が面状に見える美しいからです。これは、部屋の端に立って天井を見上げるとわかりやすいと思います。



企画展示室のルーバー型照明（*）

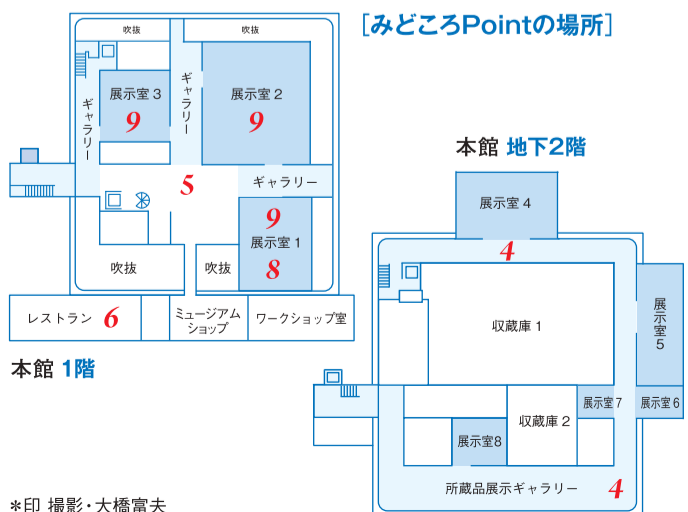
10 三つの広場

山側からもアクセスできるよう、ガラス屋根の上にはグレーチング床の「屋上広場」を、その先には県立観音崎公園に続く「山の広場」を設けています。視線の先には東京湾が広がり、周囲の景観との一体感を最も味わえるのがこの場所だと言えるでしょう。東京湾を行き交う船を眺めていると、いつまでも飽きることがありません。一方、建物前面に広がる芝生が「海の広場」です。ワークショップ室と連動した活動や野外映画会などのイベントを行うこともあります。若林奮の巨大な作品《VALLEYS》が設置されているのもここです。潮風に吹かれて芝生でのんびり海を眺めることは、横須賀美術館の楽しみ方の一つに挙げられるのではないのでしょうか。三つの広場の存在は、「地形を利用して景観と建物とを一体化させる」というコンセプトの実現によって、この建物が単なる作品展示の「箱」ではなく、「場所」をつくる役目を果たしていることを感じさせてくれます。

屋上広場（*）



【みどころPointの場所】



*印 撮影・大橋富夫